

東大駒場友の会



会報 第37号

二〇二一年度教養学部長との懇談会について

村松真理子

「東大駒場友の会」はこの春も多くの新入生の保護者の皆様を新会員としてお迎えしました。春の行事として恒例の「新入生保護者と教養学部長との懇談会」を四月十日(土)に開催しました。新型コロナウイルス感染症の流行状況を考慮し、今年度もZoomウェビナーを使つてのオンライン形式としたため、昨年同様、北海道から沖縄まで、まさに全国からの参加申し込みがあり、最大時三〇〇弱の接続数でした。今春は当会が一般社団法人として設立されてから最多の新入生保護者の入会者をお迎えし、その多くの方々がオンラインで繋がってくださいました。ご家族での視聴もあわせると、従来のキャンパスでの開催に比べても非常に多くの方に、全国津々浦々から、広くご参加いただけたかと考えています。

プログラムは会長・浅島誠本学名誉教授の歓迎の挨拶にはじまり、当会の趣旨・活動について紹介されました。続いて、森山学部長のご講演。教養教育の精神や現在のプログラ



森山工教養学部長

ムの趣旨や、キャンパスの成り立ちについての紹介と併せ、感染症流行にあたっての大学・学部の考え方についての説明がありました。さらに、駒場で夢になった音楽や、その情熱がその後フランス語や文化人類学の勉強に打ち込むことに発展していき、どのようにマダガスカルへの留学や現在までのご研究に繋がっていったかについてが語られ、駒場で過ごす時間が学問の世界と社会に旅立つにあたってどんなに貴重なものか、熱のこもったお話しでした。

プログラム後半は、オンラインでキャンパスを知っていただく「バーチャルツアー」でした。昨年、当会が教養学部と共同で制作した動画「二〇二〇駒場キャンパスツアー」から、普段立ち入ることのできないミステリアスな「地下通路」や時計塔上空のドローンからの見晴らし、さらに一九三五年の渋谷の町も見える第一高等学校の駒場移転時の記録映像など興味深い映像を見ていただきました。さらに、一高時代からの駒場の変遷について、鋭の国文学者(源氏物語) 田村隆先生が、貴重な資料や写真をまじえながらお話しされました。そして、「ズーム」の「ブレイクアウトルーム」機能を用い、文理さまざまな分野の三〇人の現役教員ひとりにつき一グループをつくって、参加者の皆様とオンライン上で懇談の時をもちました。それぞれの先生の教育・研究・キャンパスでの生活から学生の授業風景まで、親しく保護者の皆様とおしゃべ

りする場となりました。

春の若葉と花々の美しいキャンパスで、実際に現役教員や学部長の肉声を聞いていただき、食事と懇談を一緒に楽しむ例年の形での開催は残念ながら本年も叶わなかったものの、教養学部とその自然や歴史をさまざまな角度から紹介し、教員と直接リアルタイムで語り合っていたく機会を設けることができました。一日も早くキャンパスで皆様と出会う日を心待ちにしつつ、引き続き、現在進行中の教育研究を紹介し、会員の皆様と駒場をつなぐイベントを開催する予定です。コロナの感染状況等を考慮しながら、オンラインも用いた新しい試みを今後も行いますので、ご感想やご希望をお寄せください。

(東大駒場友の会事務局長 総合文化研究科教授)

社員総会と活動報告会について

六月十二日(土)、今年度の「社員総会・理事会・活動報告会」を、昨年同様、オンライン形式で開催いたしました。例年好評の「懇親会」は、当会理事、教養学部長、教員、会員の皆様とが集い語らう貴重なひとときですが、今回もやむなく中止となりました。社員総会では、今年度の行事の開催形式について話し合わせ、遠方にお住まいの会員の皆様にもより多くご参加いただける好機ととらえ、オンラインツールを活用し、駒場の教育研究活動への関心を高めるような企画立案をすることによって一致しました。

「活動報告会」の配信に先がけて行われた社員総会での審議を受け、理事会で浅島誠会長の議事進行により協議・承認された

二〇二〇年度事業・会計報告と二〇二一年度事業計画・予算について(ここに報告します)。

二〇二〇年度事業報告

Ⅰ 懇談会・講演会の開催(すべてオンラインツールを活用)、その他の事業

一 新入生ご父母と教養学部長との懇談会(四月十三日の予定を九月十九日に延期)

二 味覚のアトリエ@駒場(十一月八日)

三 秋の講演会(十二月十二日)

四 金曜特別講座(受講案内、申込受付)

五 学事カレンダー製作

Ⅱ 寄付事業の推進

「学生のための寄付」に加え、特例的に「コロナ対策支援への寄付」事業を実施し、会員有志や未入会の新入生父母から合わせて四、〇五九、〇〇〇円のご協力をいただいた。主な寄付先と使途は以下の通り。駒場図書館学生用図書(九九九、九六〇円)、三鷹国際学生宿舍院生会(十八万円)、学生団体への支援(二団体へ合計二八〇、四〇〇円)、駒場祭協賛(四〇万円)、駒場博物館(特別展広報活動支援、六九五、四二〇円)、一高向陵碑(農学部改修費(一八四、八〇〇円)。寄付事業経費二四一、九三二円と合わせ、寄付支出の合計は二、九八二、九五二円となった。※コロナ対策支援についての詳細は別紙をご覧ください。

Ⅲ 広報活動

一 会報第三五号(二〇二〇年十月十五日)、第三六号(二〇二一年三月十五日)

二 Webサイト

<https://tomonokaic.u-tokyo.ac.jp/>

Ⅳ 会員数

二〇二一年三月三十一日(期末) 終身会員一六一名、通常会員三四二名、会友会員二、

二八一名（合計二、七八四名）。一 高同窓会会員一五七名、東高同窓会会員六〇名。

V 理事会・社員総会や会議の開催

一 理事会・社員総会の開催（六月十三日）

二 事務局運営会議の定期開催（六月八日、

十月二十九日、一月二十五日、三月八日※すべてオンライン形式で開催

二〇二一年度事業計画

一 懇談会・講演会・演奏会などの開催

一 新入生保護者と教養学部長との懇談会（四月十日にオンライン形式で開催済）

二 講演会等の開催 主催講演会の開催はじめ教養学部や研究室主催の社会連携的文化行事への協力

三 主催行事「味覚のアトリエ@駒場」

四 音楽活動の支援（教養学部オルガン委員会、ピアノ委員会と協力し開催形式を検討）

II 寄付事業の推進

「学生のための寄付」として寄せられる寄付金を活用し、教養学部および学生団体への寄付、教員からの事業提案への支援を継続し、駒場キャンパス、三鷹国際学生宿舍等の教育研究の環境の向上と多様化に協力する。コロナ感染症の影響で必要となる支援を教養学部と連携し行う。

III 広報活動

一 会報第二七号、第三八号

二 webサイト

IV 理事会・社員総会や各種委員会の開催

一 理事会・社員総会・活動報告会の開催（六月十二日オンライン形式で開催済）

二 事務局運営会議の定期開催（年四回）

二〇二〇年度決算は別紙、二〇二一年度予

算は、webサイトをご覧ください。

「宇佐美圭司 よみがえる画家」展

加治屋健司

二〇二二年四月から八月まで東京大学主催の展覧会「宇佐美圭司 よみがえる画家」が駒場博物館で開催された。展覧会の企画者の一人として、開催の経緯、展覧会の概要や反応について書いてみたい。

この展覧会は、二〇一八年四月に判明した絵画の廃棄処分に関連して。ご承知の方も多いと思うが、長らく本郷キャンパス中央食堂にかけられていた宇佐美圭司の絵画《きずな》（一九七七年）が、前年の中央食堂の改修工事の過程で廃棄処分された事件である。私は学内の数少ない現代美術の研究者として対応に関わることになり、学内の文化資産の管理体制を検討する会議に参加したり、宇佐美の活動や文化資源のあり方を考えるシンポジウムを企画したりした。その後、作品が失われたことの意味を考えるには宇佐美の絵画を見ることが重要であるとの考えから、駒場博物館で展覧会を開催することになり、館長の三浦篤教授、博物館の折茂克哉助教とともに企画・実施を担当した。

展覧会は当初、二〇二〇年秋に実施する予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大のため延期し、二〇二二年四月十三日～二十七日を学内公開期間、四月二十八～六月二十七日を一般公開期間にすることにした。だが四月二十五日に東京の緊急事態宣言が発令されたため一般公開を延期せざるを得ず、実際に一般公開が始

まったのは七月一日であった。その分、会期の終わりを八月二十九日まで延長して、当初予定していた通り二か月間の一般公開を行った。

本展覧会は、作品数十一一点の小規模な展示である。駒場博物館が所蔵するマルセル・デュシャンの《花嫁は彼女の独身者たちによって裸にされて、さへも》（《大ガラス》東京ヴァージョン）（一九八〇年）以外は、全て宇佐美の作品である。点数は少ないが、宇佐美の長年の活動全体を振り返ることを目指し、宇佐美の主な時代の絵画を集め、珍しい彫刻作品も展示した。

この展覧会のもうひとつのテーマは、作品の再制作である。まず、失われた《きずな》の再現画像を作成した。《きずな》は正面から高解像度で撮影した写真がなかったため、知人の専門家の協力を得て、写真や資料などをもとに画像を作成した。そして《Beau: Joint》（一九六八年）を再制作した。この作品は、レーザー光線を用いた世界最初期のインスタレーションで、宇佐美の重要作品でありながら、三〇年近く展示されていなかった。再制作にあたって総合文化研究科の久我隆弘教授と竹内誠助教にご協力いただいた。お二人はレーザーの専門家である。文理を問わず様々な分野の専門家の協力を得られるのは駒場ならではの強みである。

再制作は、芸術作品のオリジナリティや複製、メディア・アート作品の保存修復などを考察する上で、近年、研究上の重要な論点になっている。展覧会は、《きずな》と《Beau: Joint》の二作品を、同じく再制作されたデュシャンの《大ガラス》東京ヴァージョンとともに展示することで、現代美術におけ

る再制作について考察することも目指した。

新型コロナウイルスのために、なかなか一般公開できずもどかしかったが、それ以外はおおむね順調に進んだ。来場者は二二〇〇名を超え、多くの方に観ていただいた。会期中に講演会やシンポジウムなど四回の関連イベントをオンラインで行い、延べ五〇〇名近い方々が参加してくれた。

多くの新聞や雑誌が展覧会を取り上げてくれたのもうれしかった。朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、日本経済新聞、東京大学新聞、『アートコレクションズ』、『ウェブマガジン』、『アトスケープ』、『ウェブ版『美術手帖』』、『ウェブ版『The Art Newspaper』』などであり、概ね好評だった。毎日新聞は、記者による展覧会評に加えて、高階名誉教授が連載コラムで取り上げてくださり、朝日新聞は展覧会評だけでなく、東京大学出版会から刊行した展覧会カタログの書評も掲載してくれた。

展覧会が終わり、絵画廃棄処分事件への対応としては一区切りついたと言えるが、まだやるべき作業は残っている。学内の文化資産の管理体制には依然として課題があるし、宇佐美の再評価も始まったばかりである。大学の一員として、また現代美術の研究者として今後に必要な作業に取り組んでいければと考えている。

最後になるが、東大駒場友の会には、展覧会を開催するたびにチラシの印刷費等のご協力をいただいている。今回もポスター、チラシ等のデザイン料と印刷費をご協力いただいた。この場を借りてお礼申し上げる。

総合文化研究科教授
超域文化科学専攻（表象文化論）

東の橄欖 西のオリーブ

田村 隆

オリーブは柏とともに旧制第一高等学校の校章の意匠である。一高の第十七回紀年祭(一九〇七年)の記念絵葉書(図版)の包紙には「上部一列に立てる樹は柏葉にしてマルスの神をあらはし、下にある一本の樹はミネルプの神を表はす橄欖樹なり、共に我が校章にして文武兼備を意味す。」との解説がある。

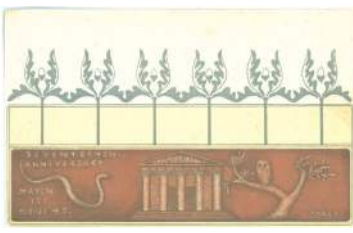
駒場キャンパス一号館前庭には一高時代からのオリーブの古木と齋藤阿具教授自筆の「橄欖」移植記念碑(一九三三年)が残る。

碑の隣の説明版は、一高同窓会の発案に基づいて教養学部によって二〇〇六年に設置された(拙稿「一高のオリーブ」『東京大学環境報告書二〇一八』)。木に取り付けられた「オリーブ」のネームプレートは他の樹木と同様に駒場友の会(当時)の支援によるものである。『教養学部報』でもしばしばこの木について触れられ、「一号館近くのオリーブの木は東京の寒空にも緑の葉を絶やさずギリシャを思わせ、横のマロニエは春ともなればパリを思い出させる。」(木村陽二郎「退官の辞」第一九三号、一九七三年一月二十三日)、「昭和十二年頃、旧制一高の大部屋といわれた教室で独語の菅虎雄先生がお話しておられたことが私の記憶に残っている。この橄欖は一高の斎藤阿具先生が、(一)退官記念として、本郷千駄木町の自宅からここに移されたのだという。」(鈴木光蔵「駒場の小さな思い出」第二五八号、一九八〇年四月十四日)などの記事がある(移植については齋藤阿具邸→本郷→駒場とする証言もある)。

このオリーブは上部が枯れるなどかなり弱っていて心配されたが、環境委員会での議論を経て昨年一月に剪定や土壌改良等の手入れがなされ、碑も通路側に移された。それからは樹勢も回復し、元気な葉を出すようになった。最近の様子は東アジア藝文書院(EAA)のホームページで公開されているショートドキュメンタリー「一高中国人留学生と一〇一号館の歴史展―駒場に眠る留学生資料とともに」に映像があり、東大駒場友の会の二〇二二年度学事カレンダーにも私の撮ったオリーブの写真を載せていただいた。

ところで、寮歌「新壘」(一九三七年)の一節「望月の満つれば欠くる 嘆にも橄欖の梢」でも「橄欖」が「おりぶ」と歌われるように、「オリーブ」橄欖の理解は広く定着しているが、橄欖はカンラン科(インドシナ原産)で、オリーブはモクセイ科(地中海沿岸原産)で、本来は別の木である。この混同は幕末期の漢訳聖書においてオリーブを橄欖と「誤訳」したのが始まりとされる。『日本国語大辞典』で「橄欖」を引くと、両方の木が載っている。

なお、「東の橄欖 西のオリーブ」の題は平川祐弘先生の『東の橘 西のオレンジ』(文藝春秋、一九八一年)に倣ったものである。



オリーブと橄欖が別物であることは当の一高生の一部も承知していたようで、『校友会雑誌』第三五四号(一九三六年二月)所載の石川光春「橄欖弁」には牧野富太郎博士の「オリーブ



は橄欖ではない」という題の文章が付され、西洋ではオリーブの実に形状の似た橄欖の実を「Chinese Olive」と俗称することから、聖書の漢訳者がオリーブを橄欖と翻訳したと推測されている。ちなみに、本家の橄欖は都内では小平市の東京都薬用植物園で見ることができ、温室に入っすぐの所に鉢が置かれていた。葉の形などはオリーブとは全く異なる。

昨年度のAセメスターは、日越大学(ベトナム国家大学ハノイ校日越大学)の授業をコマ担当した。駒場開講の予定だったが、学生達はハノイで受講するオンライン授業となった。ホーチミンの市場で(本家)橄欖の実が売られている写真をインターネットで見かけ、授業では駒場の「橄欖」や検見川総合運動場ゆかりの大賀蓮の話もした(蓮はベトナムの国花)。受講生の一人、ファム・クイン・リエンさんは、ベトナム語で橄欖は「trái cà phê」(cà phê)という料理があることを教えてくれた。豚肉と橄欖の実の煮物で、肉じゃがのような味と聞いた。Cookpadなどに肉じゃがならぬ肉橄欖の美味しそうな写真が載っている。豚肉のかわりに魚を使つた「cà kho trăn」もあるという。「コロナが落ち着いたら」云々の話を昨春以来何度繰り返しただろうと思うが、橄欖も願わくはいつかハノイで味わってみたい。

総合文化研究科准教授
超域文化科学専攻(国文・漢文学)

私が研究者を目指す理由

金子直嗣

駒場で研究を始めて五年目、多くの時間を費やして研究者となるために博士号の取得を目指してきた。今後の進路について考えるためにも、博士論文の執筆を開始する前になぜ研究者を志すに至ったのか整理してみた。今回は私が研究職を目指すまでの経緯と、これまでの大学院で進めてきた研究内容の一部について紹介したい。

私は幼少期から、父親が脊髄損傷による日常動作の障害により苦労する姿を見て育ってきた。脊髄損傷では脳と脊髄の連絡が途絶されて運動機能が障害される。損傷部位は自然に回復することはなく、再び日常動作を獲得することは困難とされてきた。しかしながら、父親は運動療法や鍼灸治療など様々な手法を用いた十数年間のリハビリテーションを経て、自立して最低限の生活ができるまで回復した。私は脳や脊髄といった中枢神経系が秘めた可能性を目の当たりにし、リハビリテーションにより脳や脊髄はどのように変化するか、なぜ父親が失われた運動機能を回復させることができたのか疑問を抱いた。現在の指導教員である中澤公孝教授の研究室を訪れた時、私はその答えに近づいた気がした。学部四年生の頃、研究室見学の際に中澤教授からこれまで進めてきた研究内容について紹介していただいた。その際に、長期的なりハビリーテーションにより脳や脊髄の機能と構造が変化すること、神経科学の分野で発見された新たな知見がリハビリテーションに応用されつつあることを知った。その後、自分でも

勉強を進めていく上で、父親の回復を裏付ける科学的な証拠や更なる回復の可能性を見つけた。気づけば私は神経科学という学問に知的好奇心を刺激され、中澤教授の研究室でリハビリテーションへの応用を見据えた神経科学の研究をするために大学院への進学を決意した。

この頃から、「父親と同じような脊髄損傷患者に対する運動機能の回復に貢献できる研究がしたい」という強い意志が私の中に芽生え、このことが大学院における私の研究テーマ選定の契機となった。私の研究は、脊髄損傷、脳卒中、パーキンソン病などに起因する運動障害の画期的リハビリテーションにその成果を応用することを目指している。そこで運動障害後のリハビリテーションとして知られる運動観察と運動イメージに基づいた介入手法についての研究に取り組んできた。運動観察とは他者の動きを客観的に観ることであり、スポーツ選手の動きを観ることもその一種と言える。運動イメージとはある動作を頭の中で想起(イメージ)することであり、スポーツ現場ではイメージトレーニングとして使用されることもある。運動観察や運動イメージは、場所や器具の制約が少ないことや、身体の一部が怪我や麻痺などにより動かすことができない場合にも実施できるという利点を持つ。私は日常生活の質に大きく影響する歩行を研究対象として、歩行観察と歩行イメージが脳や脊髄に及ぼす影響について調べた。一連の研究から、歩行の観察とイメージの併用、すなわち歩行を観察すると同時に頭の中で歩くイメージをすることで、どちらか一方のみを実施するときよりも神経活動が

大きく変化することが明らかとなった。特に興味深いのが運動野における神経活動の変化である。運動野は手足を動かすなどの簡単な動作から歩行動作、複雑なスポーツ動作に至るまで様々な運動を制御する脳部位である。私は他者の歩行を観察しつつ自ら歩行するイメージを描いた際の運動野の活動が、実際に歩いているときの活動と驚くほど似通っていることを発見した。つまり、実際には歩いていないにも関わらず、歩行を観察しながらイメージすることで、運動野はあたかも歩いているかのように振る舞うのである。この結果は、運動の観察とイメージの併用が実際に身体を動かさない患者のリハビリテーションにも有効である可能性を示している。現在は運動の観察とイメージの併用を組み入れた新たなリハビリテーションの開発を進めている。

上記で紹介した以外にも多くの研究に携わらせていただいた。熱意だけでは研究を進めることは難しく、中澤教授をはじめ、助教の先生、ポストドク研究員、大学院生、事務の方々、家族のサポートがあったからこそ、今まで研究に精一杯取り組むができた。周囲に対する感謝の気持ち、自身が研究者を志す動機とその熱意を忘れずにこれからも研究を続けていきたい。現在も変わらず、父親が苦勞してきた脊髄損傷を起因とする運動障害を克服するための有効な方法を見出すことが私の研究意欲の根幹にある。いつか私の研究成果が父親を始めとする障害を患う方々の機能回復の一助になることを願う。

大学院総合文化研究科 広域科学専攻
生命環境科学系 身体運動科学研究室
(中澤公孝研究室) 博士課程三年

ダイバーシティとインクルージョンに向けての取り組み

受田宏之

東京大学では近年、「ダイバーシティとインクルージョン」(多様性と包摂性)という理念を重視しており、その実現に向けて様々な取り組みを行っています。ここで、学問の基礎を学ぶ前期課程のある駒場の役割は重要です。大学本部では、前期課程の学生に向けて、ダイバーシティとインクルージョンの理念にかかわる動画を作成し、七月末よりTCILMS(学習管理システム)上で、前期課程の学生全員が視聴できる体制を整備しました。動画は、(一)イントロダクション、(二)合理的配慮と環境整備、(三)ジェンダー、(四)多様な性的指向と性自認、(五)性的同意の五編からなります。いずれも、東大生として、および一人の人間として、これだけは知っておいてもらいたい、さらには自らのあり様を反省的に振り返るきっかけとして欲しい、という思いから作られています。

この場を借りて、動画作成にご協力いただいた先生方(熊谷晋一郎、瀬地山角、四本裕子、清水晶子(敬称略))と学生団体(TOPIAとTOTOKO)に厚く御礼申し上げます。現在、前期課程では、本部や学生団体と連携しつつ、ダイバーシティとインクルージョンの正規授業化について検討しています。駒場には学際性や寛容さの伝統があるわけですが、知の先端を担いつつ、これまで以上に自由で開かれたキャンパスになるための仕組みを作り上げていきたいと考えています。

総合文化研究科文系副研究科長

またお目にかかれる日を心待ちに

フランス料理

ルヴェ ソン ヴェール 駒場

現在、入構制限中のため営業自粛中です。

各種宅配キットをオンラインショップにてお取り扱いしています。

おせちご予約受付中 : 早割り特別価格は10月31日まで

<http://leversonverre-tokyo.com/restaurant/komaba/>

Tel : 03-5790-5931 / Fax : 03-5790-1902

◎駒場ファカルティハウス内

東大駒場友の会会報【第37号】2021(令和3)年9月15日発行

東大駒場友の会 会長 浅島 誠

〒153-8902 目黒区駒場3-8-1 東京大学 駒場ファカルティハウス内

電話 : 03-3467-3536 FAX : 03-3465-3334

メール tomonokai@post.c.u-tokyo.ac.jp

web サイト <https://tomonokai.c.u-tokyo.ac.jp/>

デザイン・印刷 株式会社双文社印刷

<https://www.sobun-printing.co.jp>



会報のバックナンバーをインターネット上でご覧いただけます。

東大駒場友の会ホームページのトップ画面に「会報バックナンバー」というボタンがありますので、そこからお入りください。

<一般会計>

収 支 計 算 書

2020年4月1日から2021年3月31日まで

(単位:円)

勘 定 科 目		予 算 額	決 算 額	差 異	備考
I 事業活動収支の部					
1. 事業活動収入					
(1) 会費収入	①通常会員会費収入	1,600,000	1,474,000	126,000	
	②会友会費収入	5,800,000	5,920,000	△ 120,000	
	③終身会員会費収入	500,000	657,000	△ 157,000	
	会費収入計	7,900,000	8,051,000	△ 151,000	注1
(2) 寄付金収入	①学生のための寄付金収入	3,000,000	4,059,000	△ 1,059,000	
	寄付金収入計	3,000,000	4,059,000	△ 1,059,000	
(3) 事業収入	①保護者と教養学部長との懇談会	900,000	0	900,000	
	②活動報告会	0	0	0	
	③食関連セミナー	50,000	229,000	△ 179,000	
	④秋の講演会	50,000	0	50,000	
	⑤父母向けイベント	50,000	0	50,000	
	⑥カレンダー事業	50,000	7,200	42,800	
	事業収入計	1,100,000	236,200	863,800	
(4) その他収入	①受取利息収入	500	546	△ 46	
	②雑収入	1,000	0	1,000	
	その他収入計	1,500	546	954	
事業活動収入 計		12,001,500	12,346,746	△ 345,246	
2. 事業活動支出					
(1) 事業費支出	①給料手当支出	1,000,000	1,000,000	0	
	②臨時雇賃金支出	20,000	0	20,000	
	③福利厚生費支出	300,000	300,000	0	
	④会議費支出	500,000	23,488	476,512	
	⑤旅費交通費支出	10,000	5,500	4,500	
	⑥通信運搬費支出	1,000,000	694,077	305,923	
	⑦消耗品費支出	210,000	206,517	3,483	
	⑧印刷製本費支出	1,000,000	682,035	317,965	
	⑨賃借料支出	60,000	0	60,000	
	⑩委託費支出	1,110,000	1,100,016	9,984	
	⑪諸謝金支出	245,000	245,000	0	
	⑫寄付支出	4,500,000	2,740,580	1,759,420	
	⑬雑支出	75,000	72,203	2,797	
	事業費支出計	10,030,000	7,069,416	2,960,584	
(2) 管理費支出	①給料手当支出	400,000	400,000	0	
	②臨時雇賃金支出	0	0	0	
	③福利厚生費支出	0	0	0	
	④会議費支出	100,000	3,769	96,231	
	⑤旅費交通費支出	3,500	0	3,500	
	⑥通信運搬費支出	250,000	224,352	25,648	
	⑦消耗品費支出	100,000	67,581	32,419	
	⑧印刷費支出	100,000	80,039	19,961	
	⑨光熱水料費支出	120,000	78,514	41,486	
	⑩事務室賃借料支出	220,000	215,876	4,124	
	⑪会員証作成費支出	300,000	160,830	139,170	
	⑫入会勧誘活動費支出	180,000	173,470	6,530	
	⑬会費等振込料負担金支出	700,000	536,066	163,934	
	⑭委託報酬支出	1,100,000	1,093,732	6,268	
	⑮雑支出	10,000	5,280	4,720	
管理費支出計		3,583,500	3,039,509	543,991	
事業活動支出 計		13,613,500	10,108,925	3,504,575	
事業活動収支差額		△ 1,612,000	2,237,821	△ 3,849,821	
II 投資活動収支の部					
1. 投資活動収入					
投資活動収入 計		0	0	0	
2. 投資活動支出					
投資活動支出 計		0	0	0	
投資活動収支差額		0	0	0	
III 財務活動収支の部					
1. 財務活動収入					
財務活動収入 計		0	0	0	
2. 財務活動支出					
財務活動支出 計		0	0	0	
財務活動収支差額		0	0	0	
IV 予備費支出		(1,000,000)			注2
		0		0	
税引前当年度収支差額		△ 1,612,000	2,237,821	△ 3,849,821	
法人税、住民税及び事業税		70,000	70,000	0	
当年度収支差額		△ 1,682,000	2,167,821	△ 3,849,821	
前年度繰越収支差額		10,316,556	10,316,556	0	
次年度繰越収支差額		8,634,556	12,484,377	△ 3,849,821	

注1: 会費収入に含まれている前年度前受金額は、通常会員会費収入889,000円、会友会費収入3,176,000円です。

注2: 予備費使用額 事業費支出－消耗品費支出80,000円、委託費支出710,000円、諸謝金支出185,000円、雑支出25,000円。

「コロナ対策支援への寄付」 御礼とご報告

会長 浅島誠

昨年十一月より会員の皆様にご協力をお願いした「コロナ対策支援への寄付」には、二二七名の方から合計一、八四四、〇〇〇円をお寄せいただきました。心より御礼申し上げます。教養学部と協議し学生が安全に学べる環境の整備と拡充のため、従来の「学生のための寄付」への協力分と合わせ、駒場図書館の図書自動貸出機一台と講義棟や体育館等に設置する非接触型消毒用アルコールディスプレイペンサー三十五台の寄贈を今年三月～四月に完了いたしました(費用合計二、六二五、一五〇円、二〇二二年度会計に計上)。今後も有意義な寄付事業のため、ご理解とご協力をくださいますようお願い申し上げます。



友の会より、各種ご案内

◆友の会主催行事のご案内

＊味覚のアトリエ@駒場
＊秋の講演会



いずれもオンライン形式での開催です。日時、申込み方法等は決定次第、当会WEBサイトに掲載いたします。

◆駒場博物館・次回展示

九月十八日(土)～十一月二八日(日) ※要予約

＊CONNECTING ARTIFACTS

つながるかたち展 01

＊久保亮五生誕百年記念

「原理の学」に魅せられて――

物理学者・久保亮五の研究と人生展

詳細は駒場博物館WEBサイト
<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/>
を「確認ください」。

◆第七二回駒場祭

十一月二日(日)～三日(火・祝)

※オンライン開催

詳細は駒場祭WEBサイト
<https://www.komabasai.net/72/prehold>
を「確認ください」。

「高校生と大学生のための 金曜特別講座」受講のご案内



同封チラシ

降も継続して金曜講座を受講可能かどうかは、現段階では未定です)

二〇二二年度・冬学期の金曜講座のスケジュールは同封チラシ記載の通りです。九月二四日から十二月までのほぼ毎週、および一月二日と一月二八日の金曜日、十七時三〇分から十九時まで開講します。講座終了後、質疑応答を延長する可能性があります。退室は自由です。受講希望の方は、<https://bit.ly/3DJjwK>または左記QRコードのフォームより必要事項をご記入の上、お申込みください。受付手続きに日数を要するため、直前にお申込みをいただいても講座の受講に間に合わない可能性もありますので、ご注意ください。なお、ご質問等への回答には一週間ほどお時間をいただくこともございます、どうぞご了承ください。



お申込み QR コード

東京大学教養学部では、高校生の進学意欲向上に資するため、「高校生と大学生のための金曜特別講座」という無料の公開講座を開講しています。二〇二二年から四〇〇回以上開講しており、毎回、東京大学の教員が、自らの専門分野の面白さをわかりやすく伝え、六〇分間の熱い講義を行っています。これにより、高校までの基礎教育と、大学からの専門教育の間に存在するべき「進路選択のための教育」を充実させることを目指しています。また、コロナ禍の中でも対応できるように、Zoomウェビナーを用いたオンライン配信を行っています。

このような本講座は、社会人のリカレント教育としても有意義であると考えられます。そこで、二〇二二年度・冬学期の金曜講座につきましても、東大駒場友の会の会員の皆様にもオンラインでご参加いただけることになりました。(ただし、二〇二二年度・夏学期以

※ご質問等は、東大駒場友の会事務局内の金曜講座担当窓口まで、電子メールにて tomonokai.friday.lecture@gmail.com宛に「ご連絡ください」。電話窓口はありません。

(注) 東大駒場友の会および金曜講座事務局では「質問に」対応できません。

※詳細は、金曜講座WEBを「ご覧ください」
<http://high-school.c.u-tokyo.ac.jp/>